

ソヴェトの寄宿学校

柴 田 義 松

細 谷 俊 夫

I 寄宿学校成立の歴史的＝社会的背景

- (1) はじめに
- (2) 寄宿学校創設の客観的根拠
- (3) 寄宿学校の前史

II 寄宿学校の組織

- (1) 寄宿学校組織の現状
- (2) 寄宿学校の入学規則
- (3) 寄宿学校と家庭・社会との関連

(4) 寄宿学校の教育組織

III 寄宿学校の教授＝教育活動

- (1) 寄宿学校における教授＝学習活動（日課表）
 - (2) 寄宿学校における労働教育
 - (3) 寄宿学校における集団教育
- あとがき

I 寄宿学校成立の歴史的＝社会的背景

(1) はじめに

1956～57年度より、ソヴェトには、新しい学校組織——寄宿学校が設けられることになった。最初の年に設置された寄宿学校は、全国で300余りにすぎないが、この新しい学校組織開設という事実の教育史的あるいは政治的＝社会的意義は、かなり大きいと思われる。というのは、「寄宿学校は、子どもの公教育の新しいシステムの芽生えであり、先進的教育経験の実験所であり、現在の条件下における教授—教育機関の模範である¹⁾。」といわれ、寄宿学校は将来のソヴェトにおける教授—教育機関の「基本的タイプ²⁾」となるであろうと予想されているからである。

このような寄宿学校の創設が決定されたのは、1956年2月に開かれたソヴェト共産党第20回大会においてであった。この大会は、第6次5カ年計画にかんする審議を中心にソヴェトの今後の経済・文化の発展にかんする諸問題を討議したのであるが、この大会にたいするソ同盟共産党中央委

員会報告のなかで、寄宿学校創設にかんする問題がはじめて提案されたのである。ここでの提案以前に、政府、党あるいは教育界でどのような論議が行なわれていたかは、今のわれわれには知るよしもない。しかし、この大会でのフルシチョフ提案以後は、寄宿学校の組織にかんする問題は「教育省の第1義的な課題」（同大会でのカイロフ演説）と言われるほどになり、教育学文献にも寄宿学校にかんする論文は数多くあらわれるようになった。そこで、われわれは、これらの文献を通して、まず何故今日寄宿学校の組織が、ソヴェトで大きな教育問題となるようになったのかを考察してみることにしよう。

(2) 寄宿学校創設の客観的根拠

ソヴェトの学校教育の基本的目的が、共産主義社会の積極的な建設者の養成にあることはとくに言うまでもない。社会主義から共産主義への移行を実現せんとするソヴェトにおいては、そのための物質的—生産的土台の建設とならんで、共産主義への移行に必要な精神的前提条件をつくりだすことの重要性があらゆる機会に強調せられてい

1) И. А. Каиров и др., Народное образование в СССР, 1957, стр. 272.

2) И. А. Каиров, Основные вопросы организации и содержания учебно-воспитательной работы в школах-интернатах, «Советская педагогика», 1956, ИЮ-6, стр. 7.

る。成長中の世代の共産主義的教育にかんする問題は、したがって、ソヴェトの政府や党のもっとも大きな関心事のひとつとなっている。新しく設置される寄宿学校が、「いまよりも一層高い水準において成長中の世代の共産主義的教育を行なうことを使命とする¹⁾」のはその意味で当然のことと言えるが、しからば、今日の学校教育にはどのような欠陥があるのだろうか。普通の学校組織とは別に、今日新しい教育施設を設けることの理由はどこにあるのだろうか。

新しい教育組織の必要は、従来の教育組織に何らかの欠陥があることを当然前提とするものである。今日のソヴェトの一般の教育組織にみられる欠陥は何か。まず第1にあげられることは、学校教育の実生活からの分離、いわゆる理論と実践との分離である。学校の授業は、いまでもコトバ主義的性格を多分におびていると非難されている。さらに、教授の内容や方法が、今日の社会主義建設、現代の技術、工業、農業の発展に緊密に結びついていないため、学校の卒業生が実際活動に十分に準備されていないことが各方面からたびたび指摘されている。

学校のこういった面の欠陥を克服するうえに重要な意義をもったのは総合技術教育^{ポリテクニズム}の実施であった。第5次5カ年計画にかんする第19回党大会の指令によって総合技術教育が学校に導入されるようになって以来、教授と生活・生産労働との結合は、じょじょにその成果をあげつつあった。しかし、現在の学校教育制度のように1日5～6時間の課業しか行なわれないようなところでは、教授を生活や生産労働に真に結びつけることは非常に難しいことであり、そこには大きな限界がある。

さらに、ソヴェトの学校教育がもつ第2の欠陥は、今日の学校というものが基本的には学習指導機関としてこの性格が強くて、子どもに十分な訓育的影響を与え得ないでいる点にある。子どもが学校の直接的教育の影響の下にある時間というのは、1日のうちあるいは1年を通じて極めて短い限られた時間にすぎない。しかも、その時間の大部分は、主として学習指導に向けられているの

である。今日の学校は、訓育的活動を十分に展開するための物質的手段をもたないし、教師もまた学習指導のための教養はもっていても、訓育活動のための訓練は十分に受けていない。

このため、訓育の機能は、ソヴェトでも、主として家庭にゆだねられ、就学前のみならず就学中も主に家庭で行なわれることになっている。ここにもっとも大きな問題がある。今日ソヴェトのすべての家庭が、子どもの教育に適した状態にあるとはいえない。ソヴェトでは、労働能力のある人間の大多数は、社会的生産労働に従事している。したがって、両親とも働きに出ているという家庭がたいへん多いが、こうした家庭では自分たちの子どもの教育に十分な注意をはらうことができないばかりが多い。また戦争の結果、多くの婦人が未亡人となっているが、こういう母親には子どもを十分に世話する時間もないし、可能性も乏しい。こうした状況では、多くの子どもたちの世話が、親類や近所の人々の手にゆだねられ、かれらはときとしては、何らの監督もうけなくて、放任されている。

また一方では、資本主義的旧習がいまだに一部のソヴェトの市民の意識や生活のなかに生きている。これらの旧習が子どもに有害な影響を与えていることは稀ではない。一般に、矛盾した要求、相互に排他的な要求が子どもに作用することほど、子どもの心理・道徳的品性に有害な影響をおよぼすものはない。

今日の学校教育にも幾多の欠陥があるが、それとともに重大な問題はこうした家庭教育の不備をどうやって補うかということにある。寄宿学校²⁾創設の「客観的必然性」は、何よりもまずこうした家庭の教育の援助にあるとも言われているのである。

(3) 寄宿学校の前史

ところで、寄宿学校設置の問題は、今日全く突然に生じたのだろうか。ソヴェトには、はたして従来こうした試みは全然無かったのだろうか。周知のように、イギリスには、古くから全寮制度をとるパブリック・スクールがある。革命前のロシ

1) М.Ф. Щабаева, 40 лет народного образования в СССР, 1957, стр. 164.

2) Каиров и др., там же, стр. 272.

ヤにも、一部貴族の子女のための貴族女学校には、寄宿制をとっているものがあつた。革命後、教育の社会主義化を目標に旧来の教育の全面的改造につとめたソヴェトにおいて、寄宿学校はどのように評価されたのだろうか。

この点を明らかにする文献として第1にとりあげたいのは、1920年代に広く教科書として使用されたピンケヴィッチの『教育学』である。ピンケヴィッチが、この書でつぎのように書いているのは、今日の問題状況に照らしあわせてみて興味深い。

「今日、学校は、たいいていのばあい何よりも教授する施設、すなわち一定の形式で、一定の順序で知識を伝達し、生徒の知識習得を促進するところとなっている。もちろん、すべての学校で子どもは学習するだけでなく遊んだり、体操をしたり、あれこれの技術を学んだりしている。しかし、現代の学校の本質的特徴は、教授であり、特に1日3時間から5時間しか子どもが学校にいないようなところでは然りである。

われわれの観点よりすれば、現代の学校のもっとも本質的な欠陥は、学校が1日の4分の3の時間を学校外で、学校の影響外で過ごす子ども、そしてすでに一定の知識と技能、一定の世界観の萌芽をもって学校へやってくる子どもを、その仕事の対象としていることにある。はるかにより完全な教育形態が『子どもの家』——すなわち、子どもができる限り早くからそこへはいり、成人になるまでそこで過ごす教育施設——であることは疑いない。このような教育施設は、18世紀の革命家や教育者たちの念願であつた。このことについては、近年また今日のロシヤにおいて、多くのことが語られたり、書かれたりしている。幾つかのものは、すでにわが国にも外国にも作られている。子どもの家には、われわれ現代の教育者がつくってみたいと思うとおりの『教育的環境』をつくりだすことができる。学校では、われわれは多くのことについて無力である。家庭・学校外の環境の方が、しばしばわれわれよりも強力である。」¹⁾

ピンケヴィッチが理想的な「教育的環境」として考えた「子どもの家」というのは、要するに、

子どもの教育にかんする学校や家庭や社会のあいだの矛盾や不統一を無くし、若い世代の成長・発達に統一的なしかも間断なき、包括的な影響をあたえんとするものであつた。この考えかたが、「寄宿学校」の理念に相通ずるものであることは、すでに言うまでもないが、ピンケヴィッチが、従来の学校教育について述べている批判が、今日ソヴェトでなされている学校教育批判と軌を一にするものであることは、興味深い。

ところで、こうした思想の系譜をさかのぼるならば、ピンケヴィッチも述べているように、われわれはフランス革命期の思想家、とくにルペルシエに、寄宿学校にかんする明瞭な見解を見出すことができる。ルペルシエが立案した「国民教育計画」は、全国民の普通義務教育を寄宿制にするというものであり、ソヴェトの寄宿学校制度を予言したものとしてみると興味深い。*

* ルペルシエは、従来の教育計画が知育偏重であるのを不満とし、国民教育は子どもに教授とともに訓育をも保証するものでなければならぬとした。彼はこのために「国民教育の家」、すなわち寄宿制の学校を設立することを提案した。彼は言う——「永続的な生活様式、健康的で児童期に適した栄養、段階的でしかも中庸を得た労働、漸進的ではあるがたえず繰り返行なわれる訓練——これらが、習慣を作る唯一の手段である。これこそ身体のあらゆる発達を促し、またそれによつて得られるあらゆる能力を授ける有効な手段なのである。

徳育についていえば、委員会[コンドルセが議長]が提出した計画では、若干の有益な教訓、若干の授業時間、これだけの狭い範囲だけに徳育を包含している。それは僅かの時間を費すだけである。一日中、その他の時間は、すべて環境の偶然に委ねられており、児童は、授業の時間がすむと、すぐに贅沢な逸楽なり、高慢な虚栄なり、貧乏人の無様なり、不規律な閑暇なりに放任される。」

このようなことでは、真の人間を、市民を、そして共和国民を形成することはできない。そこで、ルペルシエは、議会に共和国のために一大決心をなすことを要求する。すなわち、彼の教育計画によれば、「男子は5才から12才まで、女子は11才まで、すべての児童が、差別も、例外もなしに、共和国の費用で共通に育てられ、すべてのものが、平等なる健全な法律のもとで、同一の衣服、同一の食事、同一の教育、同一の世話を受ける。」これによつて、「すべての児童は、五才

1) А. П. Пинкевич, Педагогика, том II, 1929, стр. 5—6.

から12才までの七年間、公教育の恩恵に浴するであろう。人生のこの期間は、人間の身体的、道徳的陶冶にとって真に決定的なものである。この期間は、毎日毎瞬、完全に監督のもとにおかれなければならない。」

ルベルシエの「国民教育案」は、革命議会の教育計画のうちでも、もつとも急進的なものであった。ルベルシエ案は国民公会の壇上に活潑な討論を沸き起し、一時は議会も通過し、法令にまでなったのであるが、結局は、当時の社会状況では実行不可能な案として、葬り去られてしまったのである。¹⁾

一方、革命後のソヴェトでも、このような教育機関の設置が実際に問題とされ、たとえば、ウクライナの教育人民委員会議〔文部省〕が1920年に出した「社会主義的教育にかんする宣言」は、「子どもの家」が社会主義的教育の基盤とならねばならないと宣言している。しかし、この提案は、それを実施するための経済的・文化的前提が当時には欠けていたために、実際に施行されるにはいたらなかった。

だが、とくに1918年から1921年にかけてソヴェトの各地に設けられた『学校共産自治体』は、「子どもの家」すなわち寄宿学校の一つにはかならないものであった。これらの学校の詳細については今は分らないのであるが、1919年春に創設された「バラシヨフスカヤ学校コムーナ」を例にとってみると、このコムーナは、幼稚園（5～8才の児童）、小学校（8～13才の児童）、中学校（13～18才の少年）、農業技術学校（18～20才の青年）より成り、ここへは、両親のない子ども、片親の子ども、物質的に恵まれない、あるいは自発的に自分の子どもをこのコムーナに入れたいと望む両親の子どもが収容された。コムーナの費用は、全部を国家が負担した。コムーナの教師、教育者には、統一労働社会主義学校の原理に同意するもつとも優れた教師、教育者が選ばれた。このコムーナには、各種の作業場があり、農場、果樹園での作業も行なわれ、労働と理論的教授とは緊密に結びつき、相互に補足しあう形で行なわれた、とい

われている²⁾。

また、この種の学校として特に有名なのは、マカレンコのジェルジンスキー・コムーナである。マカレンコは、このコムーナおよびそれ以前には、浮浪児や犯罪少年を収容するゴリキー・コロニーで、子どもの集団教育にすばらしい成果をあげた。これらの施設における教育活動は、マカレンコの『教育詩』、『塔の上の旗』、その他の書物、論文によって広く知れわたっているが、今日、寄宿学校の発足にあたってマカレンコの経験に学ぶことの必要が強調されているのは、当然のことと言えよう。

このように見てくると、寄宿学校の新しい発足は、決して今日突然にはじまつたものではないといえることができる。しかし、それでは寄宿学校は、社会主義社会の必然的な教育形態となるものなのであろうか。まだ発足したばかりなのだが、はたしてソヴェトの寄宿学校制度は、今後、すべての小・中学校にあまねく実施されるようになっていくのだろうか。こういう問題にたいする解答は、諸般の事情を詳にしてからでないと断定できないのであろうが、少なくとも今日ソヴェトの論者たちが言うところによれば、「それまでにはかなりの期間がかかるとしても、寄宿学校は、疑いもなく、将来のソヴェトの教授—教育機関の基本的タイプとなるにちがいない。」「今日の我国には、この雄大な課題を成し遂げるあらゆる条件が具わっている。われわれの国では、社会主義的経済形態、社会主義的労働組織が支配し、人間の人間による搾取、労働者の失業、貧窮は根絶された。ソヴェトの社会は、エンゲルスが『共産主義の原理』*において提起した要求を実現に移すあらゆる可能性をもっている」³⁾。のである。

* エンゲルスは、『共産主義の原理』(1847年)において、つぎのように述べている。「すべての子どもを、母親の初期の養育なしで子どもがやってゆけるときから、国家の施設で、国家の費用で教育すること。教育と生産とを結合すること。」⁴⁾

1) Erziehungs programme der Französischen Revolution, 1949, Volk and Wissen, S. 124~125. 渡辺誠『フランス革命期の教育』51~53頁。

2) И. А. Каиров, там же, стр. 5~6.

3) И. А. Каиров, там же, стр. 5.

4) エンゲルス『共産主義の原理』, 青木文庫版, 26~27頁。

Ⅱ 寄宿学校の組織

(1) 寄宿学校組織の現状

寄宿学校の創設は、さきにも述べたように、フルシチョフの第20回党大会への報告にもとづいて出発したものであった。フルシチョフは、この報告のなかで、つぎのように述べている。

「われわれは、どのようにして、この課題の実践的解決にあたるべきだろうか。郊外や景色のよい地域や健康に適した森のなかに寄宿学校（なにかよい名前をつけるべきだろう）を建設するのは、明らかに当をえたことである。これらの学校には、明るい、広い教室、立派な寝室、設備のととのった食堂、あるゆる種類の課外活動のための設備、すなわち、ソヴェトの国の年若い市民の全面的な肉体的、精神的発達にとって有利なあらゆる設備がそなえられなければならない。ただ親が希望した場合にだけ、子どもをこの寄宿学校に入学させるようにすべきである。子どもたちは、この寄宿学校にはいると、ふだんはそこで生活する。親たちは、休日や休暇中や放課後に子どもたちをたずねてくる。この学校のために、若い世代の魂の技師という崇高な天職にあたいするすぐれた教師をえらばねばならない。

これらの学校に入学する物質的条件については、すくなくとも、はじめのうちは、いくつかの段階をもうけるべきである。低額の給料をとっている親、あるいは大家族をかかえている親の子どもの費用は、すべて国家の負担とする。高額な給料をとっている親は、その子どもたちの教育費用の一部分をはらうべきである。さいごに、若干の親は、寄宿学校に在学している子どもたちの教育に国家が支出している金額を全部はらうことができる¹⁾。」

この提案は、ただちに「ソ同盟共産党中央委員会の報告にもとづくソ同盟共産党第20回大会の決議」（1956年2月24日）において承認され、寄宿学校は、1956～57年度より早速開設されることになったのである。

1956～57年度初頭に開設された寄宿学校は、300校余り、収容児童は62,000人を上回った。こ

れら寄宿学校は、ソ同盟の全共和国にわたって設置された。主な共和国についてみると、ロシア共和国には、183の学校に、約33,000人の児童が、ウクライナ共和国には、50の学校に1万人余の児童が、白ロシア共和国には、12の学校が、カザクス共和国には、8の学校が設けられた。

第6次5カ年計画によれば、1957～58年度には、寄宿学校に収容される児童数を16万人に、そして1960年までには100万人に増加させることになっている。また、第6次5カ年計画中に寄宿学校に支出される金額は、300億ルーブル、うち170億ルーブルは寄宿学校の建設に、130億ルーブルは、その経営費に支出される予定となっている。

第20回党大会への報告におけるフルシチョフの「この教育制度の重要性は、いくら大きく評価しても、しきれない。この活動には、資金も努力も惜しんではならない。これらは、百倍にもなっ²⁾てかえってくるからだ」というコトバによっても、寄宿学校の発展にたいする当局の熱意と意気込みがうかがわれるようである。

(2) 寄宿学校の入学規則

1956年に定められた寄宿学校の入学規則によれば、子どもは、もっぱら両親あるいはそれに代る人の希望により寄宿学校へ入れられる。ただし、そのさい優先的に入学を認められるのは、父のない子ども、傷病軍人・勤労不能者の子ども、孤児、および児童の教育に必要な条件が欠けている家庭の子どもである。

寄宿学校での子どもの生活費にたいしては、両親は、その収入に応じて一定額を負担することになっている。ただし、両親のない子どもの場合とか、子どもの多いあるいは収入の少ない家庭の場合は、全額を国家が負担する。しかし、全体としては、両親が負担する寄宿学校の子どもの生活費は、1956～57年度のばあい全額の10%にすぎないといわれている。

児童を選抜するにあたって、なんらかの教育的選考を行なうかどうかに関しては、ロシア共和国教育大臣カイロフは、そのような選考をしてはならないと述べている。「寄宿学校には、さまざま

1) フルシチョフ「第20回党大会にたいするソ同盟共産党中央委員会報告」——『ソ同盟共産党第20回大会』、第1分冊、合同出版社 117～118頁。

2) フルシチョフ、前掲書、118頁。

の年齢の子ども（7才～14才）がはいってくる。そのなかには、これまでさまざまな教育的には好ましくない影響の下に長くおかれてきた子ども、すなわち、教育的には放置されてきた子どもも来るかもしれない。ある人たちは、このような子どもを寄宿学校にに入れることはできない。寄宿学校は、立派に準備された、立派に教育され、立派な規律をもった子どもを収容すべきだと考えがちだが、われわれは寄宿学校は、特別な教育的選考を行なうべきではないと考える¹⁾」。

寄宿学校の将来における発展にとって、家庭・両親の寄宿学校にたいする理解が、極めて重要な意義をもつことは当然予想されることである。寄宿学校の開設にたいする一般大衆の反響はどうなのかということとは、まだくわしいことはわからないのだが、ただ1956～57年度においては、入学申込者数は、定員数をはるかに上まわったということが報告されている。

（3）寄宿学校と家庭・社会との関連

寄宿学校の組織のうえで一番問題となることは、家庭や社会との結びつきがどうなるかということであろう。

寄宿学校の創設は、子どもの教育にたいする家庭の役割、両親の教育への参与の形態を当然変化させる。しかし、寄宿学校は、家庭の教育責任を完全に取去るものであろうか。寄宿学校の子どもたちは、家庭や地域社会とどのような形で関係を保つのであろうか。

ソヴェトでは、従来から、児童を社会から、実生活から遊離した閉鎖的環境のなかで教育することにたいしては、強い批判がある。たとえば、さきに述べたルペルシエ案についても、ソヴェトの教育史家たちは、その革命的、民主的性格については高く評価しながらも、その「国民教育の家」が、当時のフランスの階級的社会の現実を無視した、ユートピア的計画であることを批判している。^{*}

^{*} ルペルシエが、ユートピア的であるということとは、実生活や家庭から隔離された寄宿制の「家」のな

かでの教育を通じて、貧困の撲滅や階級の平等化が実現し得ると考えたところにあらわれている。ルペルシエは、富者の財産によって設立される「国民教育の家」で、正しい、平等な教育を行なうことが、社会の新しい風習を創造する道であると考え、これは、「正義をも財産をも侵さない穏健な平和な革命」であると考えたのである。²⁾

だが、今日のソヴェト、社会主義から共産主義への移行を実現しようとしている現段階のソヴェトにおいては、すでに学校だけが理想郷というような形の社会からの遊離はあり得ないし、また、寄宿学校が、特権階級の利益に奉仕する階級的の学校となることも考えられない。カイロフも、「寄宿学校とソヴェト社会、生活、労働者との広汎な結びつきは、ブルジョアの児童施設と寄宿学校とを原則的に区別させるものであり、子どもを温室的教育から守るものである。」³⁾と述べ、ソヴェトの寄宿学校の本質的な特徴がここにあることを指摘している。

また、フルシチョフも、過去の寄宿学校、ブルジョアの寄宿学校が、特権階級のための閉鎖的な施設であり、支配階級の利益にしたがう貴族的教育を行なうところであったことを指摘しながら、さらにそれについて、つぎのように述べているのは、重要な指摘と思われる。

「社会主義国は、くらべられないほどよく、また完全に、子どもの教育を組織することができるし、また組織しなければならない。なぜなら、われわれは、人民に深い敵意をいだく特権的な貴族をつくりあげるのではなく、新しい社会の建設者、すなわち進歩的な全人類の先頭にたって進んでいる国民に心から奉仕する人々、気高い精神と崇高な理想をもっている人々を養成しなければならないのである。」⁴⁾

また実際に、寄宿学校がこんど新しく設置されるさいには、国民教育の機関、地区の党およびコムソモール組織、労働組合が、その創設作業に大きな役割をはたした。それは、大きな社会的＝政治的運動として行なわれ、多くの工業企業、コルホーズ、ソフホーズ、機械トラクター・ステーション

1) И. А. Каиров, там же, стр. 8.

2) Н. А. Константинов и др., История педагогики, 1955, стр. 135
コンスタンチノフ監修『世界教育史』第1巻, 青銅社版, 210頁。

3) И. А. Каиров, там же, стр. 8.

4) Ф. Ш. Ч. Ф., 前掲書, 117頁。

ソ連の集団が、寄宿学校の建設に、教室や作業場の設備、学校農園の創設に極めて積極的に参加した¹⁾。

しかし、それにしても、家庭の教育機能はどうなるのであろうか。ソヴェトの家庭が、これまで学校とともに、子どもの社会主義教育のもっとも重要な中心であったし、いまもまたそのことにはかわらないということは、フルシチョフも指摘していることである²⁾。寄宿学校の創設は、この事態をどのように変えるものであろうか。

寄宿学校にはいる子どもは、昼も夜も、また、1年を通じて大部分は、寄宿学校において生活することになる。両親は、放課後、祝祭日、休日に子どもとあうことができるだけである。その意味においては、寄宿学校は、やはり、「閉じられた学校」である。だが、寄宿学校は、単に子どもの教育における家庭の役割、両親の子どもの教育への参与の形態を変えるだけで、家庭の教育責任を取去るものではないと一般に言われている。

今日、「寄宿学校の大部分の生徒は両親をもっており、家庭との結びつきは、寄宿学校の生活の重要な側面の1つである。」すなわち、「両親は、子どもの教育に積極的に参加する。両親は、規則的に自分の子どもとあい、手紙を交換し、子どもの教育について学校の教育者集団を援助する。寄宿学校の生徒は、日曜、祝祭日、冬・春・夏の休みには家庭へかえる。寄宿学校は、両親にたいする働きかけに大きな注意を払う。生徒の生活活動を両親に知らせるために、参観日を設けたり、講演をしたり、話しあいの会を開いたりする。また、両親の集り〔両親会〕が定期的に招集され、生徒の作品の展覧などが行なわれる。また、すべての学校で、両親委員会が活動する。寄宿学校の職員たちは、子どもに両親への愛と尊敬の感情を育てるうえでの自己の責任をよく理解し、誠実に、その義務を遂行する。校長や教師たちは、両親と子どもとのたえざる結びつきを援助する。」³⁾とされている。

この両親委員会というのは、寄宿学校と生徒の両親とのたえざる緊密な結びつきを保持するために組織されるもので、その委員は、「両親会」で選挙される。委員は、寄宿学校の全活動にすべての両親が積極的に参加するよう両親たちに働きかけ、また学校の教授＝教育活動、生徒の生産実習、社会的有用労働、課外活動などの組織を援助することになっている。

そのほか、各寄宿学校には、協力委員会が設置される。この委員会は、地区あるいは都市労働者代表ソヴェト、党・コムソモール・労働組合の代表者、当該寄宿学校の活動に協力する工業企業、ソフホーズ、コルホーズ、機械トラクター・ステーションの代表者によって構成され、寄宿学校の活動が、さまざまな社会組織と緊密に結びつくうに重要な役割を演ずることになっている。

さらに、学校のなかには、教育者会議が設置されるが、これの構成メンバーは、校長、副校長、教師、最年長ピオネール指導者、学校農園主任、学校工場長、図書館員、医師、両親委員会代表である。

このように、寄宿学校の生徒と家庭との結びつきは、直接、間接のいろいろな方法を通じて保持されることになっているが、それにしても、寄宿学校の創設は、家庭の教育機能に大きな変革をもたらすものであることは疑いない。この変革が、家庭および子どもにどのような影響をおよぼすかは、ソヴェトの教育学ないし心理学の今後の大きな研究課題となるものであろう。しかし、ここでは、いまのところまだ具体的資料に乏しいので、家庭・社会との結びつきの問題は、以上のような一般的論及にとどめざるを得ない。

(4) 寄宿学校の教育組織

寄宿学校は、将来その完全な形態においては、保育所から幼稚園、小・中学校までをふくむことが予定されている。しかし、現在のところは、幼稚園以上、あるいは、小・中学校だけで組織されている。

1) Н.М. Колмакова, Опыт первого года работ школы-интернатов, «Советская педагогика», 1957, Ю.11, стр. 67~68.

2) フルシチョフ, 前掲書, 116頁。

3) И.А. Каиров и др., там же, стр. 273.

保育所というのは、3才までの児童を収容するところである。はたしてこんな時代から、寄宿学校へ入れて教育する必要があるのかどうかについては、多くの人が疑問とするところかもしれない。一般には、2才あるいは3才ごろまでの子どもにたいしては、かれらの健康に注意すること、食事や生活様式の正しい規則を守ることだけでよいのではないかと考えられやすい。しかし、最近の児童心理学者たちの研究は、実際には、この時代から子どもの基本的心理機能が形成されはじめるのであり、この時代の教育の如何によって、かれらのその後の発達が大きく左右されることを明らかにしている。

ソヴェトの心理学者が調査したところによれば、子どもの看護だけしかしない保育所では、子どもの発達にたいする無関心な態度や子どもとのコミュニケーションの不足が、子どもの言語や運動機能の発達をいちじるしく阻止していた。子どもは、満2才近くになっても全く無力な存在であった。これにたいし、組織的な教育作業が行なわれた保育所では、子どもの言語や運動は急速に発達した。

沈黙と静寂が支配し、内部の管理がうまく組織されていない保育所、子どもの生活や教育が、教育学の素養のない保母や看護婦に委ねられているところでは、多くの子どもが、2才半になっても、まだ話すこと、遊ぶことができず、心理過程はいちじるしく停滞し、その発達は極めて緩慢であった。このような子どもは、十分な用意もなく、未発達の心理をもって幼稚園へ行かねばならなかった。そして、かれらは、幼稚園でも長いあいだ重要な立後れを¹⁾みせていた。

これと同じような現象は、家庭における子どもの教育にも当然みられるはずである。母親が子どもの教育に十分な注意をはらうことができない場合は、子どもは、必要な、組織的教育の影響をうけることなしに成長することになるであろう。保育所時代の子どもから、寄宿学校の組織的教育を受けさせようとする理由は、ここにある。

幼稚園には、3才から7才までの児童がはいる。寄宿学校に設置される幼稚園では、合理的に

作られた食事、空気・日光・水のありとあらゆる利用、身体鍛練のための特別の方策、遊び、娯楽が、子どもの健全な肉体的発達を可能ならしめるために組織される。また、ここでは、母語、計算、図画、唱歌が教えられ、子どもは、周囲の世界の事物や現象にかんする初歩的な知識を獲得し、さまざまな能力や技能を身につけ、学校教育に備える準備をととのえる。

しかし、現在の寄宿学校は、小・中学校を主体として組織されている。初年度は1年から7年までの生徒をいれ、漸次10年制の中等教育を行なうことになっている。

寄宿学校では、1学級の生徒数（それは、多くのばあい同時に学年の生徒数でもある）は、30人で、労働・生産実習・外国語の授業のばあいは、さらにこれが2つのグループに分けられる。

寄宿学校の施設・設備には、最善の努力がはらわれることになっている。寄宿学校は、通例、健康的な、美しい場所に設置され、日常生活や学習に必要な最善の設備がととのえられている。すなわち、物理・化学・生物・製図・機械学・電気・家政教室、裁縫室、雨天体操場、図書室、読書室、音楽室、クラブ活動の室、運動場、農園などが設けられている。

寄宿学校の教師・教育者には、経験をつんだもっとも優れた教師、子どもの心理やその年令的特性を十分に知った、そして、子どもにたいする愛情と配慮を子どもにたいする合理的な厳格さと結びつけることのできる、自分自身の範例でもって子どもの教育に積極的な影響をおよぼすことのできる教師が選ばれる。実際、今日寄宿学校に働らく教師は、ソヴェトのもっとも先進的な教師たちであるといわれている。

Ⅲ 寄宿学校の教授＝教育活動

(1) 寄宿学校における教授＝学習活動(日課表)

1957年4月13日に、ロシア社会主義共和国閣僚会議によって制定された「寄宿学校にかんする規定」は、寄宿学校の使命にかんして、つぎのように述べている。

「寄宿学校は、全面的に発達した、教養のある共産主義の建設者を養成するという課題を、いま

1) И. А. Каиров, там же, стр. 6.

より一段と高い水準において解決することを使命とする新しいタイプの普通教授＝教育施設である。」

この課題を実現するための物質的基礎条件がどのように整えられつつあるかについては第2章で述べたのであるが、つぎにこの章においては、寄宿学校で現在どのような教授＝教育活動が行なわれているかを、幾つかの実践報告を資料としながら見てみることにしたい。

寄宿学校の教科課程は、当然、普通の学校の教科課程とは幾らか異なるものとならねばならないであろう。だが、現在のところは、まだ寄宿学校のための特別の教科課程が制定されるにはいたっていないくて、基本的には、1956～57年度より少数の学校で実験的に試行されている「中学校教科課程案」* にもとづいて、寄宿学校の教育は行なわれている。しかし、寄宿学校では、この他に次のような独自の課程を設けているところが多い。すなわち、各学年において、1週だいたい6時間の授業が選択科目にあてられ、この時間には、外国語（これは、1学年から開始される）、リズム体操、ダンス、音楽、絵画、家政の基礎、裁縫、さまざまな生産技術の教育が行なわれている。

* 本紀要 72 頁参照のこと。

寄宿学校の教授活動にとって重要な意味をもつのは、毎日の生活のレジムである。

寄宿学校におけるきまった生活のレジム、学習・労働・休息の正しい交替、そして特に自習活動の組織化は、寄宿学校における教授＝学習活動に積極的な影響をおよぼし、生徒の学習成績を高める上に重要な役割をはたしていると言われている。つぎに、モスクワ第15寄宿学校の実践¹⁾をみてみることにしよう。

この学校でも、日課表、とくに宿題の自習の正しい組織の形態を見出す上にかかなりの苦勞をしている。はじめ、宿題は16時から18時までの間にするというように定めたが、授業の成績のよくない生徒たちは、16時半、17時、さらには、17時半頃まで宿題の準備におわれ、かれらの自由な時間というものは殆どなくなる仕末であった。しかも、それでいて宿題の自習の成果は、あまりよくなかつ

た。そこで、新しい次のような時間表を組むことにした。それによれば、1～4年の生徒の授業ならびに自習はともに午前中に、学科教師の指導のもとに行なわれる。そして、午後には、図画、唱歌、手の労働、体育のみが行なわれる。たとえば、2～3学年の時間表は、つぎのような形のものになる。

第1時限——ロシア語

第2時限——算 数

第3時限——ロシア語（宿題）自習

第4時限——読 書

第5時限——算数（宿題）自習

土曜日は宿題がないので、次のような時間割になる。

第1時限——ロシア語

第2時限——算 数

第3時限——習 字

第4時限——読 書

食事と散歩を終えて16時から、唱歌、体育、労働、図画のうちの1つが行なわれ、その後15分の休憩をおいてあと16時までには読書をする。その後は自由時間となる。

ロシア共和国教育科学アカデミヤの体育・学校衛生研究所の研究者たちが、第15寄宿学校と第8寄宿学校の低学年生の宿題の自習活動を研究したところ、このようなレジムをとる第15寄宿学校の生徒の方が、生理学的反応や作業能力において、より良い指数を示した。

生徒は、きちんと宿題を行ない、学習における自主性も必要な程度に保たれた。他人のノートを書き写すような生徒は、殆どいなくなった。大部分の生徒は、一教科の宿題は、30～35分ですまし、残りの時間は、読書に費した。成績の劣る生徒も、時間の終りまでには宿題をすまし、自由時間にまで残ってするものはいなくなった。後れている生徒には担任の教師が援助をあたえたが、これは他の誰がするよりも効果があった。（以前は、自習の指導には、訓育者があたっていた。）2年間の経験が示すところによれば、こうした組織のもとでは、生徒の成績も非常によく、半数以上の生

1) В. Е. Щирвинт, Некоторые вопросы учебной работы в школе-интернате, «Советская педагогика», 1958, ию. 8.

徒が、5点 または 4点 をとることができた。

5～6学年の生徒のぼあいにも、これと同じようなことがおきた。当初の時間割による自習は効果があがらないことが明らかとなったため、5～6年の時間表は次のように変えられた。すなわち、各教科1時間の授業にたいして、大体その半分の時間が補足時間として自習のためにつけ加えられた。そのため、たとえば、週にあわせて2時間の歴史と地理の授業には、新しい時間表では3時間があてられ、週6時間の数学は、9時間となった。

そして、1時間の授業は、だいたい次のような形式で行なわれることになった。

第1時限

新教材の説明	20分
定着、問答	10分
自習、宿題	15分

第2時限

自習、宿題	10～15分
問 答	10～15分
新教材の説明	20～25分

もちろん、これは極く一般的な図式にすぎない。あるばあいには、自習にもっと多くの時間があてられ、またあるばあいには、教材の復習、定着に全時間があてられることもある。また、各教科によって授業の構成にも相異がおきる。

このように時間表を変えてから2週間後にこの学校の教師たちは、生徒にアンケートを出したりして、新時間表の検討を行なったが、その結果、新時間表の長所としては、つぎのような点があげられることが分った。

(1) 教科にかんする生徒の全学習活動を、教師が毎日監督し得るため、教師は、あたえられた教科にかんする生徒の真の知識、ならびにそれを習得する能力について十分の考慮をはらうことができる。教師は、教授の欠陥や誤りを明瞭に知り、それを訂正することができる。

(2) 自習の時間には、教師は、成績の劣る生徒を特別に面倒みたり、教材の定着のために時間をさいたりすることができる。

(3) 教授方法の多様さは、生徒の積極性や興味

を高め、知識の習得を容易にする。

(4) 授業中の質問者の数がいちじるしく増え、練習作業の数が増大し、生徒は能筆になった。成績「優」の生徒の数が増えた。

(5) すべての生徒が、宿題を組織的に行なうようになった。そして17時45分には課業を終え、あとは自分の好きなように自由時間を過ごすようになった。

(6) 新時間表施行の2週間を通じ、すべてのクラブ活動は、全員参加のもとに、はじまりの時間が遅延するようなこともなく行なわれた。

大部分の教師、とくに、ロシア語、数学・外国語の教師は、新時間表に賛意をしめした。しかし、この時間割には、幾つかの欠陥としてあげられるものもある。それは、つぎのようなものである。

(1) 補足時間があるため教師の仕事が過重になる。

(2) 1日8時間の授業、うち6時間は続けざまということは、生徒にとっては苦しい。授業のテンポは、成績の劣る生徒にとっては非常に速く、それについていくことは困難である。

(3) 教師の授業準備が極めて複雑で、大きな努力、経験、高度の熟練が必要とされる。

(4) 幾人かの生徒たちは、授業中はよく教材を覚えているのに、次の日には多くのことを忘れてしまう。暗記する時間が足りない。

(5) 朝せめて30～40分位の自主的な復習の時間が子どもには必要である。

しかし、生徒のアンケートにたいする回答でも、大部分の生徒は、新時間表の方が好きだと言いい、この方が疲れないと答えた。

授業と宿題の自習とをどう結びつけるかということは、寄宿学校における最大の教授問題のひとつといえる。この問題については、実践的にも、理論的にも、さらに多くの検討が必要とされよう。それにしても、子どもが、教育者のたえざる監督のもとにある寄宿学校においては、宿題の自習をも含め子どもの全学習＝教授過程を合理的に組織するうえにきわめて好都合な条件が存在しているといえよう*。

* ウシンスキー(ロシアの教育学者)は、宿題の問題にかんして次のように述べている。生徒に宿題をあたえるばあいには、生徒が、宿題の一步ごとに教師の指導を、たとえその教師が居なくても身に感ずるようであってはならない。宿題は、授業中に教師の直接的指導のもとに生徒が自主的な学習の技能を習得した後においてのみあたえられねばならない¹⁾。

寄宿学校におけるこのような学習＝教授過程の正しい組織のありかたは、当然寄宿学校の1日のレジムのありかたに関係してくる。モスクワ第15寄宿学校では、これまでの経験や他の学校の実践などを参考として、現在5～7学年の日課表をつぎのような形のものとし、その効果を検討しようとしている。

起 床	6時
洗面、体操、お茶	6時 ～7時
補習(授業の準備)	7時 ～7時45分
第1時限	8時 ～8時45分
第2時限	8時55分～9時45分
朝食、大休憩(戸外で)	9時45分～11時
第3時限	11時 ～11時45分
第4時限	11時55分～12時40分
第5時限	12時55分～13時40分
労働、スポーツ、社会的作業	13時40分～14時30分
正餐、散歩	14時30分～16時
第6時限	16時 ～16時45分
中 食	16時45分～17時
第7時限	17時 ～17時45分
自由時間(クラブ活動)	17時45分～20時
夜食、逍遙	21時まで
消 燈	21時

この日課表の特徴は、補習の時間が新しく設けられたところにある。この時間には、宿題の復習などを全く自主的に行なうことになっている。授業、休息、労働、スポーツなどを交互に行ない、全課業を午前、自習を夕方に集中させるような行きかたは、ここでもとられていない。このような形式の日課表は、現在この学校の他にも、レニングラード第4、モスクワ第12、コストローム第

1寄宿学校など多くの学校で試みられ、よい成果をあげていることが報告されているから²⁾、ソヴェト各地で、かなり一般的に採用されているのではないと思われる。

(2) 寄宿学校における労働教育

寄宿学校におけるすべての教授＝教育活動は、教授と社会的有用労働との系統的な結合、各種の労働活動の組織を基礎として行なわれている。

「寄宿学校の教授＝教育活動の基本的原理となるものは、教授と生産的労働との結合の原理、労働教育の原理である³⁾。」と言われている。

ソヴェトでは、1917年の革命以来、国民大衆の普通教育学校を総合技術教育化するという考え——いわゆる「労働学校」の理念——が、常に主張され、また実践されてきた。寄宿学校は、このような労働学校の理念を真に実現するところとして期待されているのであるが、実際、子どもが単に学習するだけのところではなくて、毎日の生活を送るところでもある寄宿学校には、その可能性も大きいといえよう。

(イ) セルフ・サービス

寄宿学校には、労働教育の機会はたくさんある。子どもの労働教育は、何よりもまず、自分の身のまわりのことを自分ですること(セルフ・サービス)からはじまる。このような形の労働教育は、家庭でも当然行ない得るものであり、行なわねばならないものなのだが、ソヴェトの家庭でも案外これを行なっていないところが多いらしい。キエフ第1寄宿学校のT・K・パラディエワは、次のように書いている。「われわれの寄宿学校に入ってきた子どもは、あれこれの理由で、その大部分が、家庭において正しい労働教育をうけていなかった。入学第1日にわかったことは、多くの子どもが、年令上当然かれらのなし得るような仕事にまったく慣れていないということだった。……われわれ教師集団の第1の課題は、子どもに作業にたいする興味をいだかせ、自分の労働の立派な結果を見たいという欲望をおこさせ、同時に、子どもに働くことを教えることにあった。

1) К. Д. Ушинский, Избранные педагогические сочинения, том. II, стр. 120.

2) Н. М. Колмакова, там же, стр. 72.

3) И. А. Каиров, там же, стр. 10.

生徒の労働教育は、当然、子どものセルフ・サーヴィスを組織することからはじまった。」

ところで、寄宿学校で、このような教育を行なった結果は、寄宿学校入学後数カ月にして、すでに多くの両親は、子どもが見違えるほどに変わったことを認めるようになった。子どもは、休日にはすすんで家事の手伝いをし、しかもそれらの仕事を巧みにやってのけ、できるだけ美しく、きれいにやろうと努めるようになった¹⁾。」

寄宿学校におけるセルフ・サーヴィスの組織がどのようになっているかを、このキエフ第1寄宿学校を例にとってみると、この学校では、はじめまず次のような組織が作られた。1～3学年の生徒は、自分たちの教室および寝室の掃除を、床および窓を除いて、行ない、4～7学年の生徒は、自分たちの教室および寝室を、掃除夫の助け無しで完全に行なう。また、子どもたちは、入学当初から、自分の衣服や履物を自分で清潔にすること、ボタンの縫付け、靴下の繕い、その他のあらゆる小さな修繕を行ない、衣服にアイロンをかけ、ネクタイやカラーの洗濯をすることを義務づけられた。

朝7時45分には、生徒会議の委員が各寝室を廻って清潔さを評価した。また夜9時には、同じ委員が教室を廻ってその衛生状態を評価した。その評点は、特別の用紙に書きこまれ、学校に掲示された。そして月に2回総計が行なわれ、もっとも良い成績をおさめたクラス集団には、生徒会議の決定によって賞（旗）が授与された。さらに特別の映画鑑賞、美しい花、ときには特製のピローク（ロシヤ饅頭）が与えられることもあつた。

こうして、このような衛生検査は、この学校の伝統となったが、それは、さきにも述べたように、子どもに極めて良い影響をあたえ、親たちもそれを認めるようになった。

この学校のセルフ・サーヴィスの組織は、その後さらに改善され、1956～57年度の後半期には、2～4学年の各クラスを4班に、5～8学年の各クラスを5班に分け、つぎのような作業を、各班

に委任するようになった。教室・寝室・学校の一定の場所の掃除および食堂のサーヴィス。また、5年生の第5班は、炊事場の仕事——パンを切ったり、ジャガイモ・野菜・その他を洗ったりした。また、6～8年生の第5班は、2～4年の生徒の難しい仕事——女の子の髪を結ったり、衣服の片付け、修繕、アイロンかけ、などの手助けをした。各班の仕事は、毎週交代することにされた。

子どもたちは、自分たちの労働にあれこれと工夫をこらすようになった。また、室の整頓、清潔を誇りとするようになり、その秩序や整頓を乱したものにたいしては容赦しなかった。教室や寝室の衛生状態が悪く評点されたときには、子どもたちは、誰が掃除をしたのかをきびしく問いただした。こうして、セルフ・サーヴィスの作業は、単に子どもに組織的に労働することを教えただけでなく、子ども1人1人の性向や志向を明らかにし、クラス集団の結合をも促進したと報告されている。また、この学校に限らず、今日、大部分の寄宿学校では、教室や居室の掃除、食堂のサーヴィス、衣服・履物の整頓、燃料の用意、運搬などの諸作業が、全部生徒の手で行なわれているといわれている²⁾。

(四) 生産的労働の教育

労働学校としての寄宿学校にとって、もっとも重要な労働教育は、いうまでもなく、生産的労働の教育である。今日ソヴェトでは、寄宿学校に限らず、一般の学校においても、総合技術教育の実現のために大いに努力しているのであるが、寄宿学校では特に諸々の施設——木工・金工の作業場、農園など——も立派なものを具え、充実した生産労働の教育を行なっている。

たとえば、セラフィモヴィチエスカヤ寄宿学校には、裁縫室、木工場、小鍛冶作業場が設けられ、生徒は、市民需要の製品を製作している。木工場は、重ね棚、腰掛、机を、小鍛冶作業場では、地区のMTSが需要するボルトやナットを生産している。これら製品の製作は、材料の消費も

1) Т. К. Паладиева, Опыт трудового воспитания в школе-интернате, «Советская педагогика», 1958, № 6, стр. 87.

2) И. А. Каиров и др., там же, стр. 275.

それ程大きくなく、4～7学年の生徒にも手頃な仕事であり、また生徒は、これらの作業の過程で、より複雑な生産に必要な技能をも習得することができるといわれている。また、この寄宿学校は、2～3年後には、現代的設備をもった自家動力の金属加工工場を建設し、ここで、高学年（8～10年）生徒の生産実習が行なわれることになっている。

スヴェルドロフスクのニジネ・タギリスカヤ寄宿学校には、指物・機械・製靴・ひのし・刺繻・木繊維精製の各専門工場をもつ生産合同体が組織されている。ウラジミルスク地方の農村寄宿学校は、120ヘクタールの農地、5ヘクタールの果樹園をもっている。ここの農業労働は機械化され、学校は、トラクターおよびその全備品を具えている。コルキンスカヤ寄宿学校（チェラビンスカヤ州）では、生徒はつぎのようないくつかの労働班に分れて、週3回3時間づつ生産に従事している。指物——26人、裁縫——39人、電気機械組立——12人、小鍛冶および旋盤——30人、建築18人、自動車運転——7人、畜産——11人、料理——10人、菜園——12人、園芸——8人、農事指導——20人。レニングラード第2寄宿学校では、履物工場「スコロホード」の労働者の力によって学校工場の整備が行なわれ、生徒はこの学校工場で、企業の注文品を製作している。

寄宿学校では、女子に家政の授業を行なっているところが少ない。キエフ第1寄宿学校は、5～7学年の女生徒に、手芸——裁縫、刺繻、編物、衣服、下着類のさまざまな修繕、食事の用意、洗濯・アイロンかけ、住居の飾り、衣類・家具・敷物・その他あらゆるものの保存等、女子がもっておるべき知識・能力を教授している。生徒は、この時間に、男子が労働の授業で行なうのと同じ様に、学校に必要・有用な品物を製作する。かれらは、下着や衣類を修繕し、ありとあらゆる縫い方を学び、織物の透し模様の作り方、ミシンの使い方を習い、また今のところ極く簡単なもの——シャツ、パンツ、サラファンなど——の裁ち方を習っている。

この学校の8年生は、男女に分れ、工場での生産実習に従事している。男子は、器具製造工場（コンビナート）で、小鍛冶—器具工の専門職を、女子は、組立工場（アSEMBLER）で、精密計量器の組立を実習している。このように、寄宿学校の8年以上の生徒は、生産現場で実習をすることになっているが、今日ソヴェトでは、寄宿学校をふくめ、中学校高学年（8～10学年）における教授と生産労働との結合にかんする問題は、極めて大きな教育的・社会的問題となっている。この問題は、本紀要の他の論文で詳細に紹介されるので、ここではくわしくは、ふれないが、ただ、このキエフ第1寄宿学校でも、週38授業時間中6時間を生産実習にあてることは、生徒に学習の大きな過重負担をあたえていることが問題となっているということを付言しておこう¹⁾。

* 教授と生産労働との結合にかんする問題をもふくめ、寄宿学校における高学年生徒の教育の問題は、特に取出し考察するに足る問題だと思われるが、現在のところ、実践の資料がとぼしいので（寄宿学校発足の年度には多くの寄宿学校には高学年生はいなくて、次年度よりこの問題が起きているため。）、本論文ではあまりふれることができなかった。

しかし、寄宿学校が、閉鎖的、温室的性格の学校とならないためにも、こうした生産労働の教育が非常に重要な意義をもつことはさきにも述べた。このため多くの寄宿学校は、地域の工場、企業、コルホーズ、ソフホーズ、MTSなどと緊密な関係を結ぶことに特別の努力をはらっている。たとえば、レニングラードのプリオゼルスカヤ寄宿学校は、生徒の50%が、その工場の労働者の子弟であるというセルローズ工場と特に緊密な関係を結んでいる。この学校の作業場や教室の整備には、ここの労働者集団が大きな援助をあたえたし、また工場は、高学年生徒の生産実習の場を提供している。現在9年生は、ここの5つの専門工場——中央化学試験所、電気工場、乾燥室、機械工場、イゾプリタ製造工場——で週4時間生産実習を行なっている。この工場で3年間実習すれば、かなりの生産的教育が受けられるはずで、生徒は、卒業するときには、卒業証書と同時に技能

1) Т. К. Паладичев, там же, стр. 89.

資格証書をあたえられることになっている¹⁾。

(3) 寄宿学校における集団教育

寄宿学校は、集団のなかで、集団を通して子どもを集団主義的人間に教育するというソヴェト教育の最も重要な原理——集団主義の教育——を実現するうえに極めて好都合な条件を提供する。寄宿学校における子どもの生活は、まさに集団的生活であり、その学習、労働、休息などすべてが集団のなかで行なわれるからである。したがって、児童集団の形成、その教育、強化は、寄宿学校のもっとも重要な課題と考えられ、教師集団はこの課題の成功的解決のために大きな努力をはらっている。多くの寄宿学校では、こうしてすでに強固な積極的児童集団確立の基礎が形成されているといわれている。

たとえば、レニングラード第2寄宿学校では、1年の間に強固な活動的児童集団が形成され、寄宿学校における子どもの全生活、全活動の事実上の組織者となった。この学校の生徒集団ソヴェトは、生徒の学習および課外活動、社会的有用労働の斗争本部となった。毎日の生徒全体集会においては、1日のもっとも重要な諸事件、将来の活動計画、第1次集団で行なわれた作業の総括が審議される。生徒集団において主導的役割を果たすのは、ピオネール組織であった。さまざまな社会的有用労働への参加、体育、大衆文化活動、クラブ活動は、これら生徒の率先と自主性のもとに、社会主義的競争の広汎な適用のなかで行なわれた。教師や訓育者は、学校生活のあらゆる問題について児童集団に相談し、子どもをこまごまと監督することは一切避け、生活上の重要な問題はすべて、児童集団の側からの吟味と承認をうけるようにした。こうして、この寄宿学校では、子どもの自主性・率先性と教育者の指導とが極めて合理的に結合されていると評されている²⁾。

このような児童集団が形成されるまでの過程を記録した実践報告も2、3出されている。

児童集団を最初に組織するにあたって、教育者

が共通に当面する困難は、さまざまな生徒——教育・発達水準のさまざまに異なる生徒、共同生活に慣れない生徒、個人主義的傾向をもった、規律性のない生徒——が、寄宿学校にはいてくるといことである。寄宿学校教師集団の第1の課題は、生徒のもつこうした否定的側面を克服することである。寄宿学校における生活の厳格なレジム、生徒にたいする統一的要求、毎日の絶え間ない働きかけ——こうした寄宿学校においてのみ可能となる教育的諸条件は、子どもたちが入学当初もっていた諸欠陥を除去するうえに大きな力となっている。

ある寄宿学校の2年生アナトリーは、乱暴な、働くことのきらいな、そして何回も寄宿学校から逃げて父のところへ帰るような生徒であった。だが彼は、1年後には喫煙を止め、行儀正しくなり、労働を愛し、勝手にどこかへ行くようなこともなくなった。同じクラスの生徒イワンも、わがままで、強情で、友達となぐり合い、宿題は強制されてやっとした。だが今は、はるかに平衡のとれた、よく勉強をする生徒となった。2人の生徒が、このように変っていったのは、教師ドブクラエワと訓育者クリビナの組織的な働きかけがあったからであった。彼女たちは2人の生徒1人1人と、あるいはときにはクラスのアクチーフやクラス全員のいるまゝで、いろいろ話しあい、かれらの欠点を是正する方法を助言したり、かれらの行動改善の努力をほめてやったり、特によいことをしたときには帰宅の許可を特別に増してやったりした。かれらがぞんざいに書いたノートやいいかげんにやった仕事は、やり直しさせ、授業中、休憩時間、散歩・食事・自習の時間におけるかれらの行動を注意深く監視した。この「問題児」の再教育にあたって、教師および訓育者は、クラスのアクチーフ、上級生、児童集団ソヴェト、ピオネール隊員らを助けとしながら、1歩1歩かれらの態度を新しいものに変えていったのである³⁾。

1) А. Н. Горцкова, Связь школы-интерната с жизнью, «Советская педагогика», 1958, № 6, стр. 62.

2) И. А. Каиров и др., там же, стр. 281.

3) В. Г. Милониди, Из опыта воспитания детского коллектива в школе-интернате, «Советская педагогика» 1958, № 6, стр. 71.

寄宿学校においては、上級生と下級生との相互関係がとくに重要な意義をもつ。上級生を下級生の教育に引入れる方法は、すでにソヴェトの学校では長い伝統となっている。こうした面の実践においても、優れた手本を示したのはマカレンコであったが、今日ではすべての学校がこの方法を取り入れ、子どもの教育過程を豊かなものにし、子どもの発達に好ましい影響をあたえている。上級生と同一集団のなかでいっしょに生活し、かれらとたえず交際することによって、低学年の生徒は、集団生活の真の訓練をうけ、じょじょに集団の積極的な成員となっていくのである。また一方、高学年生徒も、下級生を世話し、かれらの教育に参与するとき、自らにたいする要求を高め、下級生の模範となるよう努力するのである。このような上級生と下級生との相互関係は、寄宿学校においては、特に緊密となる。

モスクワ第12寄宿学校では、上級生による下級生の指導は、1年生には5年生、2年生には6年A班、3年生には6年B班、4年生には7年生が、クラス集団を単位として指導にあたるほか、第1次集団としてのピオネール隊を、すべての年令の児童より構成される児童集団とし、このなかで、さまざまな年令の児童の相互関係が実現されるようにした。各隊は、22人のピオネール、8人のピオネール入隊準備者（オクチャブラット）より構成される。オクチャブラットは、1～2年の生徒である。この学校には、8つの隊ができたが、各隊はほぼ同じような構成になるようにされた。すなわち、各班がすべて同数の同一年令児童、同数の男女より成り、また、成績・発達・規律性のうえでもさまざまな生徒が同じような数だけ各集団にはいるようにされた。

この学校でも、はじめはこのような集団はなく、そのピオネール隊は、同一クラス集団より構成され、第1次集団となるものは、このピオネール隊だけであった。だがこのような条件のもとで

は、生徒の生活経験が十分に多面的なものとはなりにくいことが明らかとなったため、1カ月後にこのような組織変えが行なわれたのであった。その後の経験は、マカレンコがすでに提起している命題——児童の共同生活においては、異なる年令の児童の混成組織を作ることが有益であるという主張——の正しさを証明している。このような組織は、異なる年令の児童のあいだの相互作用を一層緊密にし、上級生による下級生の指導のための自然的条件を作りだす。このような条件のもとにおいてはじめて、年少者は、年上の友達の作業方法を容易に学びとり、かれらの権威を真に尊敬するようになり、また下級生の世話をみたり、かれらにたいする責任を負うことは、上級生に人間にたいする配慮、自分自身にたいする要求のあり方を教えたのである、と報告されている¹⁾。

このモスクワ第12寄宿学校などは、今日もっとも優れた実践を行なっている寄宿学校の1つと思われるが、すべての寄宿学校がこのような第1次児童集団をもっているのではないようである。すなわち、第1次集団はクラス集団と考えられるところがなお多いのである。ロシヤ教育科学アカデミー心理学研究所のボジョヴィッチとスラヴィナの見るところによれば²⁾、多くの寄宿学校では、なおマカレンコの言うような真の第1次集団——集団と個人とを結びつける環となり個人の人格形成の真の基礎となるもの——は形成されるにいたっていない。かれらによれば、第1次集団のはたす教育的役割や意義は、今日多くの寄宿学校においては十分に評価されているとはいえない。大部分の寄宿学校では、第1次集団は、学級だと考えられているが、30人よりなる学級では、第1次集団としては、人数が多過ぎるとかれらは言う。かれらの主張は、学級を幾つかの小人数の第1次集団に分け、さらにこれとは別に、異なる年令の児童集団より成るピオネール隊を設けるという、モスクワ第12寄宿学校とはまた少し異なる集団組織を考えているのであるが、このように、寄

1) О. С. Кель и Н. П. З. Убачев, Опыт организации перичного детского коллектива в школе-интернате, «Советская педагогика», 1957, Ю. 2

Н. С. Панова, Младшие и старшие в одном коллективе, там же.

2) П. И. Божович и Л. С. Славина, Некоторые вопросы воспитательной работы в школах-интернатах, «Советская педагогика», 1957, Ю. 9. стр. 62—63.

宿学校における児童集団をどのように組織するかという問題については、まだ必ずしも統一した見解が出されてはいないようである。

あとがき

寄宿学校は社会主義社会における教育組織のひとつの理想的形態として、古くは18世紀ルペルシェの「国民教育計画」に、また、ソヴェトでも革命以来多くの人々の教育論のなかで描かれ、論及されてきた。しかし、寄宿学校制度が現実のものとなるためには、なんといってもまず、そのための確固たる物質的基礎が準備されることが必要である。革命後40年たち、社会主義発達の新しい高度の段階に到達した今日のソヴェトにおいて、ようやくそのような態勢が整い、寄宿学校を国民教育制度のなかに大きく組入れることが、ここにはじめて現実的意味をもつようになったのである。

ところで、寄宿学校創設のもっとも主要な根拠の1つが、学校教育と実生活との結びつきを強化することにあるということは、今日のソヴェトの寄宿学校を、ブルジョアジーの寄宿学校や、また過去の空想主義者たちが描いた寄宿学校——これらの学校は、実生活、実社会との分離をその特徴としている——から本質的に区別させるものとして注目される点である。すなわち、ソヴェトの寄宿学校は、今日一般の学校では十分にはたしていない「理論と実践との結合」、教育と生活との結びつきの強化、さらには家庭教育の不備を補い、子どもへの教育的作用を全面的に統制することを目的としているのである。それは、現在の学校教育のもつ欠陥を補わんとするものであるが、さらにこの寄宿学校制度は、将来の国民教育機関の「基本的タイプ」となることが予定されているのである。1958年11月16日、ソ同盟共産党中央委

員会ならびにソ同盟閣僚会議が発表した、ソヴェトの国民教育制度の根本的改革を予想するテーゼ「学校と生活との結びつきの強化ならびにわが国の国民教育制度の一層の発展にかんして」のなかでも、「寄宿学校においては、成長中の世代の教授ならびに共産主義的教育にもっとも好都合な条件が作りだされている。……寄宿学校は、教授と生産労働との巧みな結合をしめす真の模範となることが要請されている。」と述べている。

フルシチョフは、第20回党大会において、「この教育制度の重要性は、いくら大きく評価しても、しきれない。この活動には、資金も努力も惜しんではならない。これらは、百倍にもなっただけでえってくるからだ。」と語った。1956～57年度に設立された寄宿学校の数は、全国で300余りだが、計画経済の国ソヴェトのことであるから、こうしていったん決定された企画の実現は、かなり急速に進むのではないだろうか。しかし、それにしても、発足以来まだ2年しかたっていないのである。現在は、いわばまだ試行的段階にあるといった方が正しく、寄宿学校の将来にかんする確実な見通しをここで述べることは難しい。

寄宿学校における教授＝教育活動の典型的様相といったものも、実際のところまだ出来ていないようである。1ないし2年間の経験を語る実践記録もぼつぼつ出てきているが、これらによってみても明らかなことは、現在は、それぞれの学校が自主的に、日課表、教授課程、児童労働の組織、児童集団の形態等々の問題について、模索探求をつづけている段階であるということである。しかし、いずれにしても、このソヴェトの新しい教育制度——寄宿学校が、今後どのように発展するかは、大いに注目に価する教育史的事件だと思われる。